

「あたたかな医療－麻酔」

「全身麻酔で行います」と、担当医に告げられた時の戸惑いを何と表現したらいいだろう。腰骨に太い針を刺し、手術そのものよりも痛い、とイメージしたのは誰にどんな話を聞いたからだったのだろう。また、昔のテレビドラマで女優さんが麻酔から目覚めないまま、一言も発しない演技で、夫役俳優が病床で嘆き悲しむ姿も忘れられない。

自分自身に局部麻酔の経験しかなかったために、全身麻酔という未知の体験は、がんと名のついた病気の手術よりも、漠然と大きな怖れとなって入院を待つ一ヶ月間、私から離れなかった。そんな不安を看護師さんに話すと、「手術前に麻酔の先生にお話を聞く時間がありますよ。何でも質問してくださいね」と教えてくれた。

そのために私が準備した質問リストを今読み返してみると、『①麻酔の量はどのように決めるのか、②多すぎておかしくなったり目覚めないことはあるのか、③腰骨に刺す以外の方法は無いのか』だった。その質問に答えてくれたのは意外にも若い女性の麻酔医だった。医学的な根拠や稀に起こる重篤な副作用のことも全てオープンに落ちて話してくれただけでなく、睡眠導入剤と呼吸からの麻酔だけで腰骨に刺す麻酔を避ける予定であることも教えてくれて安堵した。そしてバイタルの状態の変化を見守り、「ずっとあなたのそばから離れませんから」と、私の目を見て約束してくれた。それだけで、不安や怖れから解放された。

そのおかげで、手術当日は落ち着いて臨むことができた。女性スタッフの多い華やかな声の手術室に迎えられ、「そろそろ眠くなるお薬が入りますよ」という声を聞いたのを最後に、私の記憶は突然消えた。

顔が白く明るさを感じ、私を呼ぶ声がする。その声はひとり、二人、と増え、たくさんの声になった。「成功ですよ、無事終わりましたよ」半開きの顔に眩しい光が入ってくる。この時感じた多幸感を私は忘れることはないだろう。かすれた声で「ありがとう、ありがとう」と繰り返すばかりだった。

翌日、あの麻酔の先生が回診に来てくださった。はにかんだ笑顔で「大丈夫ですか」と声をかけてくれた。私は「あんなにたくさん質問をしてごめんなさい、本当に何も痛くなくて、いつ寝たのかもわからないほどで、穏やかに目覚めたら終わっていたのです」と。そんな私に先生は、「よかったです。何も気にしないでください。ずっとそばにいましたよ」と微笑んだ。

麻酔という、その始まりに気づくことも無く、記憶さえも消し去る特別な医療の進歩のおかげで、私は痛みなく手術を終え、がん治療の第一弾を終えることができた。麻酔医の存在はまるで黒子のように手術という大舞台を支えてくれたのである。それは医療技術の進歩ではあるけれど、今、私はこのように思うのだ。「ずっとあなたのそばから離れませんよ」という人と人の心の繋がりのおかげであたたかさの医療なのではないかと。